



前川 賢治

（大阪歯科大学 欠損歯列補綴咬合学講座）

『「咬合」は顎関節症の原因なのか？』

<要旨>

「咬合異常が顎関節症を引き起こす」という考え方は、長く歯科臨床に大きな影響を与え、咬合調整や補綴・矯正的介入の理論的根拠ともされてきた。しかし、疫学研究、実験研究、介入研究や前向き研究の蓄積に伴い、咬合と顎関節症との関係についての理解は大きく変化している。本講演では、その歴史的変遷と主要な文献を概観し、日本顎関節学会の現在の見解を踏まえて、咬合を顎関節症の「原因」「リスク因子」「結果」としてどのように捉えるべきかを検討する。さらに、日常臨床において咬合を診る意義と、不可逆的な咬合治療の適応について考えたい。

<講演内容>

- I 咬合と顎関節症をめぐる考え方の変遷
- II 咬合は顎関節症の原因なのか—エビデンスから考える
- III 現在、咬合と顎関節症の関係をどう考えるか
- IV 日常臨床で咬合をどう扱うか

<専門医カリキュラム>

- ・咬合・顎運動を説明できる
- ・顎関節症の発症メカニズムと症候、
継発する病態を説明できる
- ・各病態に対し治療・管理目標を設定できる
- ・EBM の重要性を説明できる

<略歴>

1994 年 岡山大学歯学部卒業
1998 年 岡山大学大学院歯学研究科修了
1998 年 岡山大学歯学部 助手
1999 年～2000 年 文部省在外研究員（UCLA 歯学部 Oral Medicine and Orofacial Pain）
2001 年 岡山大学歯学部附属病院 講師
2012 年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 准教授
2022 年 大阪歯科大学 主任教授

代表的所属学会等：

日本顎関節学会	理事、認定歯科顎関節症専門医、指導医
日本補綴歯科学会	理事、指導医
日本歯科専門医機構	認定補綴歯科専門医
日本口腔顔面痛学会	研修機関評議員、専門医、指導医
日本老年歯科医学会	専門医
日本口腔リハビリテーション学会	認定医、指導医
日本口腔インプラント学会	専修医



塚原 宏泰

（医療法人社団宏礼会 塚原デンタルクリニック）

『顎関節雑音にどのように対応すべきなのか』

<要旨>

コクラン・システマティックレビュー（57 RCT・2,846 名、2024 年）によると顎関節症の有病率は約 29.5%、症候別ではクリック等の関節雑音 29.8%、筋痛 37.2%、関節痛 16.8%、開口障害・ロック 8.1%と報告されている。顎関節雑音の出現率は顎関節症の患者の約 1/3 に相当し、症候としてはかなりの患者数になる。

また、顎関節雑音を主訴に来院する患者も多く、当院においては 2025 年 4 月から 2026 年 3 月まで初診として来院された 250 名のうち、顎関節雑音が主訴であったものが 60 名で 24%であった。しかしながら、顎関節雑音患者の全てに治療の必要性はないことが多い。

そこで治療の必要性をどう線引きするか？が課題となる。同時に患者マネジメントの重要性も考えていかなければならない。例えば、悩んで来院された患者を治療の必要性がないと簡単に説明して終診した場合、患者が納得しせずにセカンドオピニオンを求め他の施設を受診することも珍しくない。仮に同じような説明で納得されれば良いが、大掛かりな治療を進められ患者が不利益に陥る場合もある。

今回の講演では、顎関節雑音に対して、その治療の必要性を含めてどのように対応すべきかを、文献および自身の症例を振り返って考察する。

<講演内容>

- I 顎関節雑音のレビュー
- II 顎関節雑音の病態
- III 顎関節雑音への対応

<専門医カリキュラム>

- ・顎関節雑音の病態を理解する
- ・顎関節円板障害を理解する
- ・顎関節雑音への対応を理解する

<略歴>

1989 年 日本大学松戸歯学部卒業東京医科歯科大学第 2 口腔外科
1998 年 東京都千代田区にて開業
2002 年 歯学博士
2004 年 東京医科歯科大学歯学部附属病院客員臨床教授
2012 年 日本大学松戸歯学部兼任講師
神奈川歯科大学非常勤講師

代表的所属学会等：

日本顎関節学会 理事、認定歯科顎関節症専門医、指導医
日本口腔外科学会 専門医・指導医
日本顎顔面インプラント学会 専門医・指導医



五十嵐 千浪

（鶴見大学歯学部口腔顎顔面放射線・画像診断学講座）

『MRI や CBCT で異常が見つかったら治療すべきなのか？ －画像所見と臨床症状のギャップを考える－』

<要旨>

画像検査は形態学的な評価・診断が主な目的となりますので、顎関節部における画像検査法とその正常画像解剖について概説します。

画像上明らかな異常所見が認められても無症状の場合がある一方で、強い症状を訴えていても画像上の変化が乏しい症例も経験されます。そこで、顎関節症患者における臨床診断と画像診断の関係、診断精度について概説、実際の画像を供覧しながら「画像で異常が見つかったら治療すべきなのか」を一緒に考えていただけたらと思います。

画像診断の役割と限界を理解し、画像所見をどのように臨床判断へ結び付けるべきかについて考える機会・一助となれば幸いです。

<講演内容>

- I 顎関節部の画像検査法と画像所見
- II 顎関節症の臨床診断と画像診断
- III 画像検査による経過管理と保存療法

<専門医カリキュラム>

- ・画像検査所見を説明できる
- ・顎関節症の診断および病態診断ができる
- ・各病態に対し治療・管理目標を設定できる

<略歴>

- 1993 年 鶴見大学歯学部歯学科卒業、鶴見大学歯学部附属病院 診療科助手（歯科放射線）
- 1996 年 鶴見大学歯学部歯科放射線学講座 助手
- 2008 年 鶴見大学歯学部歯科放射線学講座 講師
- 2010 年 鶴見大学歯学部口腔顎顔面放射線・画像診断学講座 講師
- 2018 年 鶴見大学歯学部口腔顎顔面放射線・画像診断学講座 准教授
- 2023 年 鶴見大学歯学部口腔顎顔面放射線・画像診断学講座 教授 現在に至る

代表的所属学会等：

- 日本顎関節学会 常任理事、認定歯科顎関節症専門医・指導医
- 日本歯科放射線学会 理事、認定医・専門医・指導医
- 東海大学医学付属八王子病院 歯科口腔外科 顎関節外来 非常勤歯科医師



佐藤 文明

（佐藤歯科医院今戸クリニック 院長）

『スプリントは本当に必要なのか？―「とりあえずスプリント」からの脱却』

<要旨>

過去には顎関節症の病因は咬合である（単一病因説）とされ、咬合調整や咬合の安定、正しい咬合獲得のために各種スプリント（現在はオーラルアプライアンス）が使用されてきた。一方、現在では顎関節症は多因子病因であり日常生活におけるさまざまなリスク因子が積み重なった結果、症状が発症するとされ、保存的、可逆的な基本治療が行われている。今回の講演では「スプリントは本当に必要なのか？」という演題に対し、今までの病因論から行われきたオーラルアプライアンス治療の変遷と役割について考察をし、現在の基本治療について解説する。

<講演内容>

- I 顎関節症の病因論
- II スプリント治療の変遷
- III 現在の顎関節症の基本治療

<専門医カリキュラム>

- ・顎口腔系の習癖を説明できる
- ・顎関節症の発症メカニズムと症候，継発する病態を説明できる
- ・各病態に対し治療・管理目標を設定できる
- ・生活指導，習癖の指導を行える
- ・理学療法を行える. オクルーザルアプライアンス(スプリント)療法を行える
- ・医療安全に沿った診療が実施できる
- ・医療倫理に沿った診療が実施できる

<略歴>

- 1989 年 北海道大学歯学部卒業
- 1989 年 東京医科歯科大学歯学部第一口腔外科
- 1992 年 佐藤歯科医院開設
- 2004 年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面外科学分野 非常勤講師
- 2007 年 東京医科歯科大学大学院 歯学博士取得
- 2016 年 佐藤歯科医院今戸クリニック移転開設
- 2022 年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面外科学分野 臨床教授
- 2024 年 東京科学大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面外科学分野 臨床教授

代表的所属学会等：

- 日本顎関節学会 理事、認定歯科顎関節症専門医、指導医
- 歯科衛生士活動推進委員会 委員長
- 日本口腔インプラント学会 指導医、専門医



大井 一浩

（金沢大学大学院医薬保健学総合研究科
外科系医学領域顎顔面口腔外科学分野）

『顎関節症は「治す」疾患なのか？－治療目標を再考する』

<要旨>

顎関節症は、顎関節や咀嚼筋の疼痛、顎関節雑音、開口障害ないし顎運動異常を主要症候とする障害の包括的診断名であり、その病態には咀嚼筋痛障害、顎関節痛障害、顎関節円板障害および変形性顎関節症が含まれます。一方、これらの症候や画像所見が、必ずしもすべて治療の対象となるわけではありません。また、顎関節症の病因は多因子性であり、その症状は時間経過とともに改善すること多いことから、治療介入の必要性を適切に判断することが重要です。そのためには、まず顎関節症以外の疾患を適切に鑑別した上で、患者に病態や自然経過を説明し、疾患教育やセルフケアを基本として、必要に応じて可逆的な治療を選択することが重要です。一方、症状が遷延あるいは増悪する症例では再評価を行い、病態に応じた専門的治療を検討する必要があります。

本講演では、顎関節症の病態と自然経過を踏まえ、「治す」ことの意味を改めて考え、過剰な治療を避けながら、患者にとって何を治療目標とすべきかを再考します。

<講演内容>

- I 顎関節症の自然経過と治療介入の必要性
- II 何を治療対象とするのか
- III 顎関節症の治療目標を再考する

<専門医カリキュラム>

顎関節症の病態を説明できる
画像検査所見を説明できる
顎関節症の診断および病態診断ができる
顎関節症以外の顎関節疾患と鑑別できる
各病態に対し治療・管理目標を設定できる

<略歴>

2000 年 3 月 北海道大学歯学部卒業
2000 年 4 月 北海道大学大学院歯学研究科口腔顎顔面外科学教室 研修医
2005 年 3 月 北海道大学大学院歯学研究科修了・博士（歯学）
2005 年 4 月 市立砺波総合病院歯科口腔外科 医員
2007 年 4 月 北海道大学病院歯科診療センター 医員
2012 年 4 月 市立砺波総合病院歯科口腔外科 医長
2014 年 10 月 金沢大学附属病院歯科口腔外科 講師
2023 年 4 月 金沢大学附属病院歯科口腔外科 病院臨床教授

2016年5月-2017年3月 Musculoskeletal Biology, Institute of Ageing and Chronic Disease,
University of Liverpool, UK (Honorary Research Fellow)
2023年5月-2023年10月 Regional Maxillofacial Unit, Aintree University Hospital, UK
(Honorary Visiting Professor)

代表的所属学会等：

日本顎関節学会 理事、認定歯科顎関節症専門医・指導医

日本口腔外科学会 専門医・指導医

日本顎変形症学会 認定医・指導医、評議員

American Society of TMJ Surgeons (ASTMJS) International member